

機関紙の水準と煽動について

あらゆる国の労働運動の歴史は、労働者のうちのもっとも良い地位におかれた諸層が、もっとも早く、またもっとも容易に社会主義の思想を受け入れる、ということを実証している。あらゆる労働運動によっておくりだされてくる先進的労働者、すなわち、労働者大衆の完全な信頼を獲得する能力をもった労働者、プロレタリアートの啓蒙と組織化の事業に全身を打ちこむ労働者、社会主義をまったく意識的に受け入れ、自主的に社会主義理論をつくりあげさせた労働者は、主としてこうした労働者層のなかから現われてくるのである。あらゆる生命力ある労働運動は、このような労働者の指導者を、自分たちのブルードンやヴァイヤン、ヴァイトリングやペーベルを、おくりだしてきた。わがロシアの労働運動も、この点ではヨーロッパのそれにおくれをとらないという見込みがある。教養ある社会がまじめな非合法文献にたいする興味を失いつつあるとき、労働者のあいだでは、知識と社会主義への熱烈な志向が増大しており、労働者のあいだではほんとうの英雄が頭角を現わしつつある。これらの英雄は、——その惨憺たる生活環境にもかかわらず、人間を愚鈍にする工場での苦役にもかかわらず——、まなびまなび、さらにまなび、自分を意識的な社会民主主義者、「労働者インテリゲンツィア」にきたえあげていくだけの性格と意志力とをもちあわせている。ロシアには、すでにこうした「労働者インテリゲンツィア」が存在しており、われわれは、彼らの隊列をたえず拡大し、彼らの高度な知的要求を完全に満たし、彼らの隊列のなかからロシア社会民主労働党の指導者たちが生まれでるようにならせるため、全力をそそがなければならない。だから、ロシアの社会民主主義者全体の機関紙となろうと欲する新聞は、先進的労働者の水準に立たなければならない。それは、自分の水準を故意に引きさげてはならないばかりでなく、反対に、たえずそれを引きあげていき、全世界の社会民主主義派のあらゆる戦術上、政治上、理論上の諸問題を注視しなければならない。そうしてこそはじめて、労働者インテリゲンツィアの要求は満たされるであろうし、彼らはロシアの労働者の事業を、したがってまたロシアの革命の事業をも、みずがら自分の手ににぎるであろう。

数のうえでは多くない先進分子の層のうちには、中位の労働者の広範な層がつづいていく。この中位の労働者も、社会主義を熱心に希求し、労働者サークルに参加し、社会主義の新聞や書物を読み、煽動に参加するが、社会民主主義労働運動のまったく自主的な指導者となりえない点でだけ、前記の層とちがっている。党の機関紙となるはずの新聞では、一部の論文は中位の労働者には理解できないであろうし、また彼らは複雑な理論上または実践上の問題を完全に理解することはできないであろう。それだからといって、新聞は自分の読者大衆の水準にまでおりにかななければならない、という結論にはけっしてならない。反対に、新聞は、まさに彼らの水準を引きあげ、中位の労働者層のなかから先進的労働者が頭角を現わしてくるのをたすけなければならない。地方の実践活動に没頭しており、なによりも多く労働運動の日々の記録と当面の煽動問題とに関心をもっているこのような労働者は、自分の一步一步に、ロシアの労働運動全体とその歴史的任務と社会主義の終局目標とにかんする思想を、むすびつけなければならない。したがって、中位の労働者をその読者大衆とする新聞は、かならず一つ一つの狭い地方的問題と社会主義および政治闘争

とを結びつけなければならない。

最後に、中位の層のうしろには、プロレタリアートの低い諸層の大衆がつづいている。社会主義新聞が、彼らにとってまったくあるいはほとんどまったく、近づきえないということも、大いにありうることであるが（西ヨーロッパでも、社会民主主義的な選挙有権者の数は、社会民主主義新聞の読者の数よりもはるかに多いではないか）、そのことから、社会民主主義者の新聞は労働者のできるだけ低い水準に順応しなければならない、という結論を引きだすのは、不合理であろう。このことからただ、このような諸層にたいしては、べつな煽動・宣伝の手段、すなわち、もっとも通俗的に書かれた小冊子や、口頭での煽動や、また——これが主要なものであるが——地方の出来事にかんするビラで働きかけなければならない、という結論が出てくるだけである。社会民主主義者は、これらにさえかぎってはならない。労働者の低い諸層のあいだに意識を目ざめさせるための第一歩が、合法的な啓蒙活動によって分担されなければならないことも、大いにありうるのである。党にとって非常に重要なことは、この活動を利用すること、この活動を、まさにそれをもっとも必要としているところへさし向けること、合法的活動家を処女地の開墾へさしむけ、あとで社会民主主義的煽動家が、そこに種を蒔くようにすることである。労働者の低い諸層のあいだでの煽動は、もちろん、煽動家の個人的特質や、場所、職業、その他の特殊性をもっとも十分に発揮させるものでなければならない。カウツキーは、ベルンシュタインを反駁した著書のなかで、つぎのように述べている。「戦術と煽動を混同してはならない。煽動の方法は、個人的、地方的な諸条件に適應させられなければならない。煽動では、煽動家の一人一人にその駆使する手段の選択を一任すべきである。すなわち、或る煽動家は、その激励によって、別の煽動家は、その辛辣な諷刺によって、さらに別の煽動家は、数々の実例をあげる能力、等々によって、最大の感銘をあたえるのである。煽動は、煽動家に順應させられるとともに、聴衆にも順應させられなければならない。煽動家は、自分のいうことが理解されるようにみな話をしなければならない。煽動家は聴衆がよく知っている事から出発しなければならない。こういうことは自明なことであって、農民のあいだでの煽動だけに適用しうることはない。馭者と話をするときには水夫を相手とするばあいとはちがった仕方で、水夫と話をするときには植字工を相手とするばあいとはちがった仕方で、話さなければならない。煽動は個性化されなければならないが、われわれの戦術、われわれの政治活動は、単一でなければならない」（二～三ページ）。社会民主主義理論の先進的代表者のこれらの言葉は、党の全般的活動における煽動についてのすぐれた評価をふくんでいる。これらの言葉は、政治闘争を行う革命党の結成は煽動を妨げるであろうとか、煽動を第二義的な地位へ押しやるであろうとか、煽動家の自由を拘束するであろうとか、考える人々の危惧が、どんなに理由のないものであるかをしめしている。反対に、組織された党だけが、広範に煽動を行い、すべての経済問題と政治問題について煽動家のために必要な指針（と資料）をあたえ、地方的な煽動の成功の一つ一つをロシアのすべての労働者の教訓のために利用し、煽動家を、彼らの活動が最大の成功をおさめることができるような環境または他方へさしむけることができるのである。ただ組織された党のなかでのみ、煽動家の才能をもっている人々は、この仕事に全身を打ちこむことができるであろうが、そのことは、煽動にとっても、社会民主主義活動のその他の側面にとっても、利益である。ここからして明らかになるのは、経済闘争に心をうばわれて政治的煽動・宣伝

をわすれ、労働運動を政党の闘争へ組織する必要をわすれるものは、ほかのことはすべてさしおくとしても、プロレタリアートのもっとも低い諸層を労働者の事業へ引きよせる仕事をしっかり、効果的に組織する可能性をさえ、みすがら棄てるものだ、ということである。

第四巻 ロシア社会民主主義派のうちの後退的傾向 P300~304

1899 年末に執筆

コメント

「あらゆる国の労働運動の歴史は、労働者のうちのもっとも良い地位におかれた諸層が、もっとも早く、またもっとも容易に社会主義の思想を受け入れる、ということを実証している。」この事実は、○◇労働者の役割の重要性を再認識させてくれ、私たちが「まなびまなび、さらにまなび、自分を意識的な社会民主主義者、「労働者インテリゲンツィア」にきたえあげていく」ことの必要性と重要性を示している。

社会民主主義者全体の機関紙となろうと欲する新聞は、読者大衆の水準にまでおりていかなければならないのではなく、先進的労働者の水準に立たなければならず、彼らの水準を引きあげ、中位の労働者層のなかから先進的労働者が頭角を現わしてくるのをたすけなければならない。中位の労働者をその読者大衆とする新聞は、かならず一つ一つの狭い地方的問題と社会主義および政治闘争とを結びつけ、労働運動全体の歴史的任務と社会主義の終局目標とにかんする思想とを結びつけなければならない。…（日刊赤旗）

労働者の低い諸層のあいだに意識を目ざめさせるためにはべつな煽動・宣伝の手段、すなわち、もっとも通俗的に書かれた小冊子や、口頭での煽動が必要である。…（日曜版）

そして、そのような煽動は、煽動家の個人的特質や、場所、職業、その他の特殊性をもっとも十分に発揮させるものでなければならず、煽動は個性化されなければならない。

プロレタリアートのもっとも低い諸層をも労働者の事業へ引きよせ、プロレタリアートによる政治権力の獲得と社会主義社会の実現のためにプロレタリアートの階級闘争を組織するためには、「煽動は個性化されなければならないが、われわれの戦術、われわれの政治活動は、単一でなければならない」、経済闘争に心をうばわれて政治的煽動・宣伝をわすれてはならない。

※「赤旗」を煽動の道具にするのであれば、幹部、一般党員用に「前衛」を位置づけ、購読を義務化する等により、先進的労働者の質を高める方策をとる必要がある。